

宮ノ台式土器の研究（５）

弥生時代研究プロジェクトチーム

はじめに

今回は神奈川県内の宮ノ台式土器の段階設定基準資料について出土状態の検討、資料の一括性の検討を行ったのであるが、今回は従来の基準資料以外について、供伴事例の蓄積を目的として出土状態を検討し一括性の確認を行った。

集成の対象は、神奈川県内の発掘調査報告書掲載資料で、竪穴住居址床面出土事例を基本として各種遺構の覆土中出土であっても遺物集中出土など複数の土器がまとまって出土している事例を含むこととした。集成の条件は、出土状況を確認できる図と説明があることを前提とし、器形がわかる実測個体が複数器種あることを条件とした。

本稿では、集成事例の中から供伴資料として良好な事例を提示する。従って、資料の時期的な偏りや対象遺跡の分布については考慮していない。提示した事例は5遺跡10遺構である。図版は、遺物出土状況等の遺構図と供伴事例と判断した遺物の図で遺構ごとに作成した。図の縮尺は、遺構図を1/120、遺物図を1/8で統一した。遺物番号は新たに付け直したため、出典の各報告書とは異なっている。

事例集成および図版作成等は当財団勤務のメンバーで分担して行った。原稿執筆は分担して行い、各文末に文責を記した。編集は伊丹が行った。（池田 治）

1. 各住居の時期について

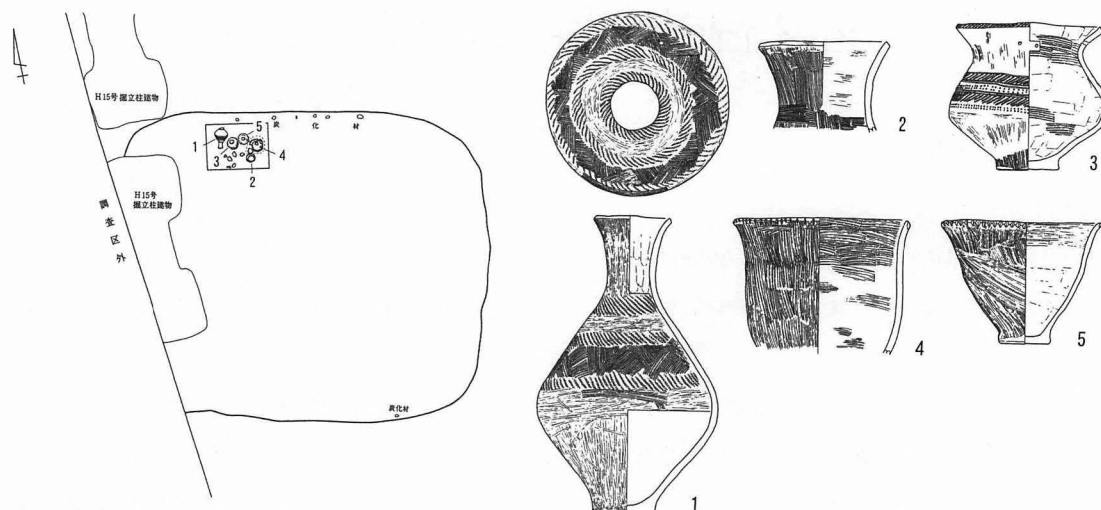
今回提示した資料は、県西部から横浜地域にかけての集落遺跡から竪穴住居址10軒を抽出した。いずれも宮ノ台式土器の中では中段階以降、従前の当弥生時代研究プロジェクトチームが提示した変遷案のうちⅢ～Ⅴ段階に属する（弥生時代研究プロジェクトチーム2001～04）。宮ノ台式の後半の様相は、壺・甕・鉢・高坏等の器種組成が確立し、全体的に無文化・簡素化し地域性が強まる傾向が指摘されている（安藤1990・91）。

壺は法量の幅が広がり、縄文帯を文様要素の基調としたものや、器面全体をハケおよびミガキで整形のものなど、簡素な土器が増加する。甕は台付甕がよく見られるようになり、全体をハケ整形するものが多くなる。また一部には器面にミガキを施されたものや、壺と同様に羽状縄文帯を頸部に巡らせたものも存在する。鉢は出土する量が最も少なく、器形は個体毎のばらつきが激しい。高坏はⅡ段階からみられる東海西部地域の系譜をひく鰐付のものがみられるが、鉢と同様に個体差が大きい。（渡辺 外）

2. 遺物の出土状況

①下寺尾西方A遺跡Y1号住居址（第1図 井澤ほか2003）

この住居址は平面形確認のみ行い掘削調査をせずに埋設保存する予定のものであったが、精査した段階で覆土中に完形土器が確認されたため、遺物保護の観点からその部分のみ掘削調査を実施した。このため、炉・周溝・柱穴などの住居址内施設については詳らかでない。平面形は東西に長い、隅丸長方形を呈するとみられる。規模は5.55×4.90mを測るが、西壁付近を古代の掘立柱建物に切られ、一部は調査区外へ延びている。北壁際からは直立していると見られる炭化材が定期的に確認された。材の間隔は14～50cm、直径は1



第1図 下寺尾西方A遺跡Y1号住居址 [遺構S:1/120 遺物S:1/8]

～10cmとばらつきがある。確認状況から見て壁柱の可能性が高い。図示した5点の土器はいずれも北壁際の床面からまとも出土している。1・3・5は完形である。1の壺は横位で、他の4点は口縁部を下にした倒置状態で出土した。また、3の広口壺には二次的な強い被熱痕がある。

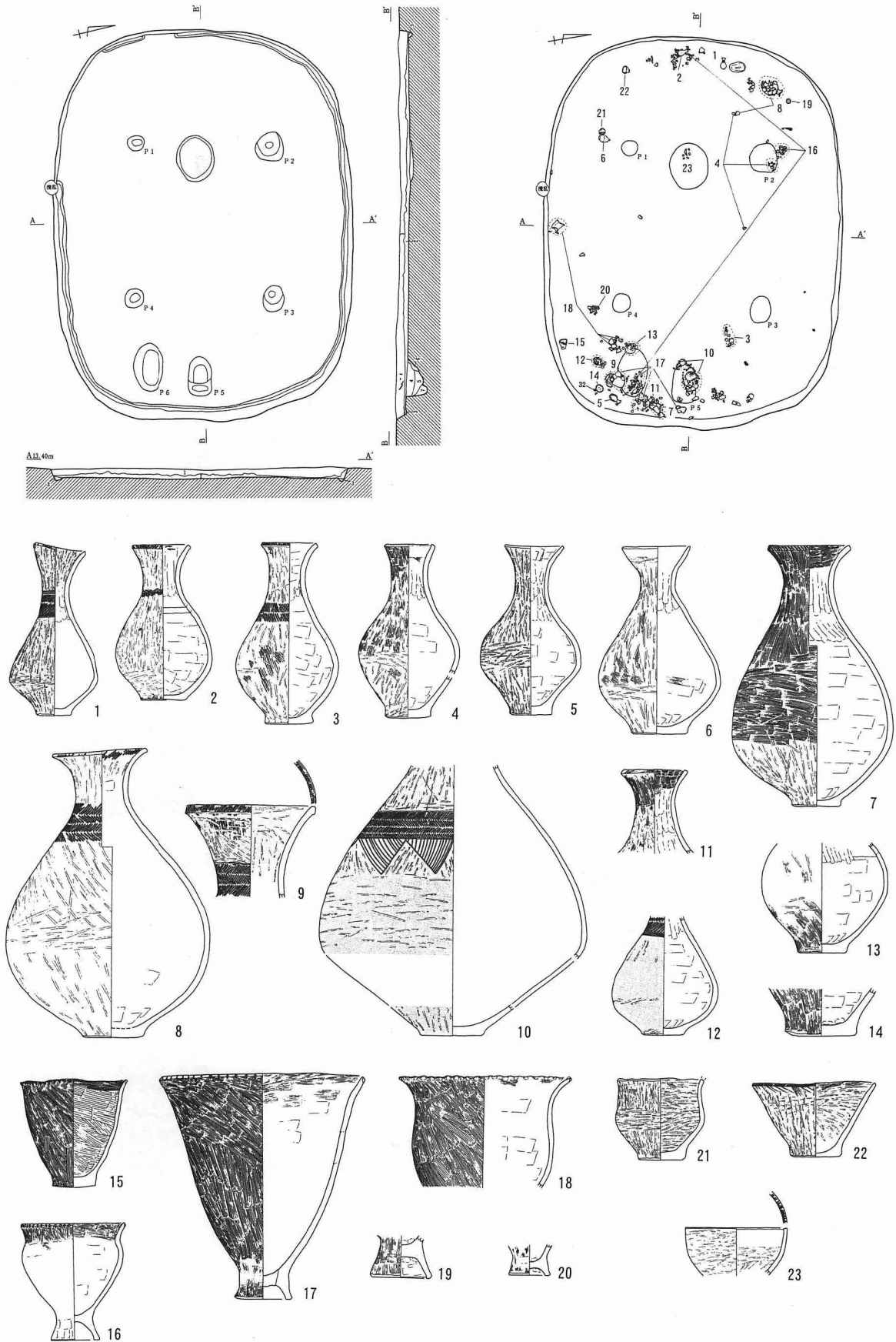
これらの点から、この住居址は焼失住居であると考えられ、出土位置・状態から一括遺棄された蓋然性が非常に高いものと考えられる。(桜井真貴)

②下寺尾西方A遺跡Y5号住居址 (第2図 井澤ほか2003)

6.14×8.08mのやや大形の住居址であるが、遺構確認面から床面までの深さが19cmほどしか残っていない。しかしながら、床面直上に多くの土器が遺存していた。覆土は基本的に上下2層に分けられ、床面上の第2層からはほとんどの土器が出土している。他の弥生時代遺構との重複はない。報告書記載の土器26点のうち、床面直上および床面相当の屋内土坑上から22点、炉から1点が出土している。床面出土土器の器種および数量は壺14点、甕2点、台付甕4点、鉢2点、高坏1点である。土器の出土位置は壁際が多く、西壁(奥壁)際の床面から完形の壺2個体を含む7点(1・2・6・8・19・21・22)が、いわゆる貯蔵穴と思われる屋内土坑周辺の東壁際から12点(3・5・7・9～15・17・20)が出土している。2箇所の纏まりはそれぞれ一括性が高いものと考えられ、また同時性のある資料とも考えられるものである。これに炉上面出土土器23とそのほかの床面出土土器を含めて、住居廃絶時前後の供伴資料と考えられる土器を第2図に掲載した。小形壺8個体と中形壺、大形壺があり、甕は深鉢形のほかに脚台が付くものがある。脚台の破片も出土している。この他の器種として鉢と高坏があり、器種は豊富である。壺は無文のものと肩部(もしくは頸部)に文様帯が1箇所施文されるものからなる。大形壺は図上復元であり胴部下半の形状および口縁部～頸部の形状は明確ではない。高坏は坏部のみであり、脚台の形状は不明である。(池田)

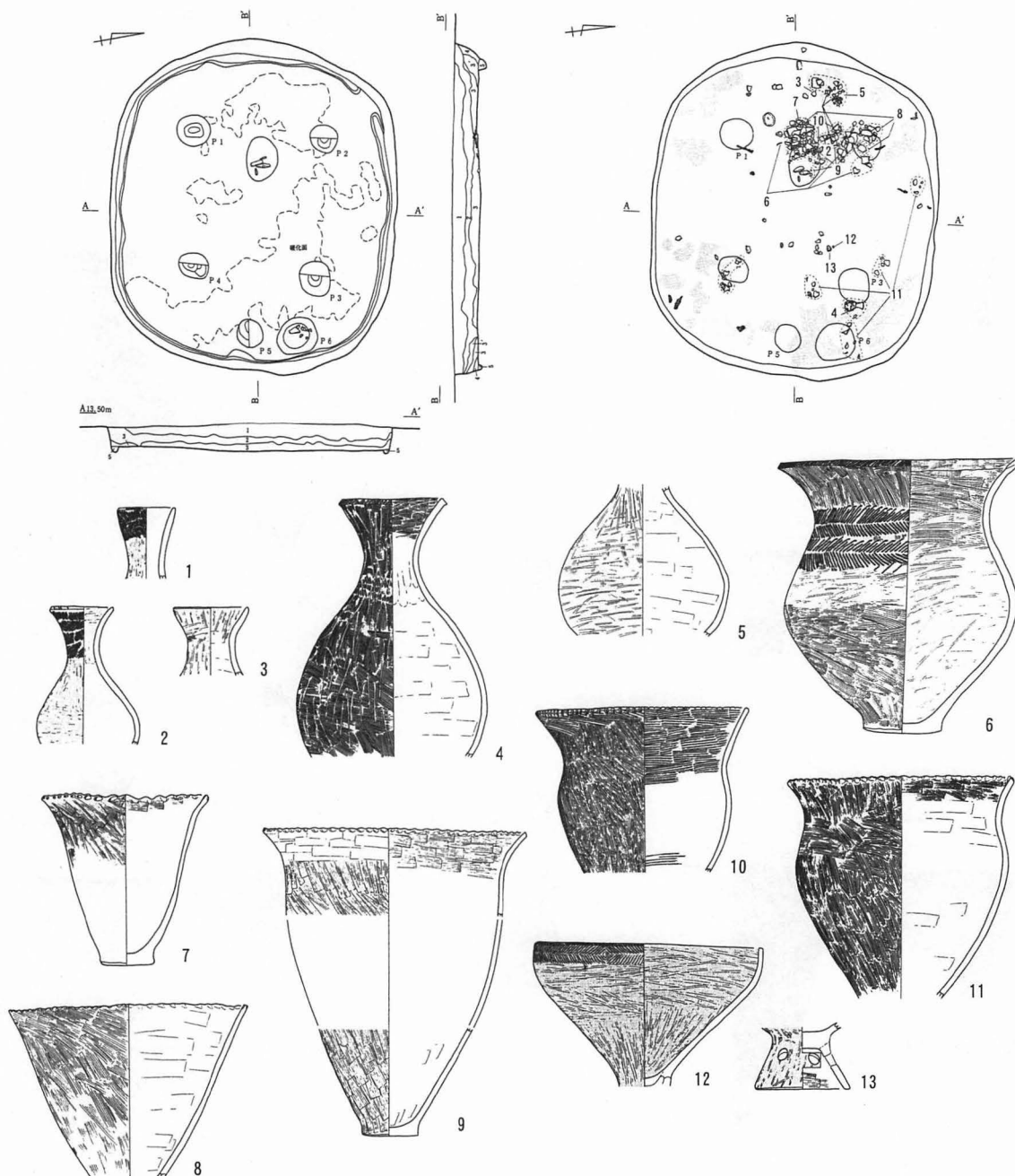
③下寺尾西方A遺跡Y9号住居址 (第3図 井澤ほか2003)

この住居址は柱穴1本(P1)と浅い皿状の土坑(P6)を全掘調査し、他の柱穴(P2～4)と出入口口施設と見られるピット(P5)は半截による土層観察にとどめている。炉址は中央奥壁寄りに存在するが、掘削調査は行っていない。また、周溝は北西部で一部欠けたものが1条、平面確認された。確認のみで掘削



第2図 下寺尾西方A遺跡Y5号住居址 [遺構S: 1/120 遺物S: 1/8]

調査は行っていない。住居址の規模は5.74×5.00mの隅丸長方形で、確認面からの掘り込みは51cmを測る。覆土中には住居の壁付近から中心に向かって流れ込むように焼土（3'層）の堆積が認められ、柱穴の外側で床面に達している。焼土の存在や、遺物出土状況から見て焼失住居である可能性が高い。遺物は炉址や出入り口付近では床面から、その他の場所では比較的高い位置で出土している。ただし、焼土の上下で出土した遺物も接合している。平面的には炉址の周辺およびその西側に多く分布している。図示した土器のうち壺（1）・広口壺（6）・甕（7～10）は炉址付近の床面から、壺（4）・甕（11）・台付鉢（12）・高坏（13）は、その他の位置の床面から出土している。出土状況は狭い範囲に同一個体の破片がまとまっていることが多く、原位置でつぶれた状況が看取できるが、8・9・11は割れて比較的離れたところの破片同士が接合している。壺（2・3・5）は床面から6～7cmほど浮いて出土している。



第3図 下寺尾西方A遺跡Y9号住居址 [遺構S：1/120 遺物S：1/8]

このような出土状況から、少なくとも4・6・7・10・12・13は一括性が保証され、その他のものも高い一括性が認められると言えよう。(桜井)

④下寺尾西方A遺跡Y12号竪穴住居 (第4図 井澤ほか2003)

この住居址は柱穴だけでなく周溝についても確認をしたのみで掘り下げをしていない。それにもかかわらず多量の土器が床面から出土していることが判明した。今回の調査地区では最大規模の住居址で8.89×7.72mを測る。炉が2基あり、周溝・柱穴の確認状況から数次の拡張をしたことが想定されている。壺(1~14)、甕(15~21)、鉢(22)のほか環状石斧や板状鉄斧の出土も見られる(18は壺の、20は台付鉢の可能性もある)。炉からは8・11・16のほか大形壺(宮ノ台式末期に通有の羽縄文・沈線区画・並行直線充填の鋸歯文をもち、赤彩を施されたもの)の胴部上位破片がみられる。梯子穴と考えられるピット上面から12が、その周辺から住居址の東半に土器は集中して出土した。床面に張り付いて出土したものは1・4・5・10・12・14・17・19・21である。その場で潰れたような状態で検出されたものが多いが、21はやや離れたところのものが接合し、床から8cm浮いた状態で出土した15は壁際から流れ込んだような状況を示す。17は底部を欠いたまま倒置されていた。21のような台付甕が確実に伴うことから宮ノ台式でも末葉の様相を示すことが伺われる。また、13にみられる貝田町式土器に淵源をたどることのできる土器の出土は注意されよう。このような器形は千葉県常代遺跡でも知られているが、むしろ見晴台式から山中式にかけて認められる台付鉢に重ね合わせたほうがよいのかもしれない(永井・村木2002)。ただしこれは7cmほど浮いての出土である。

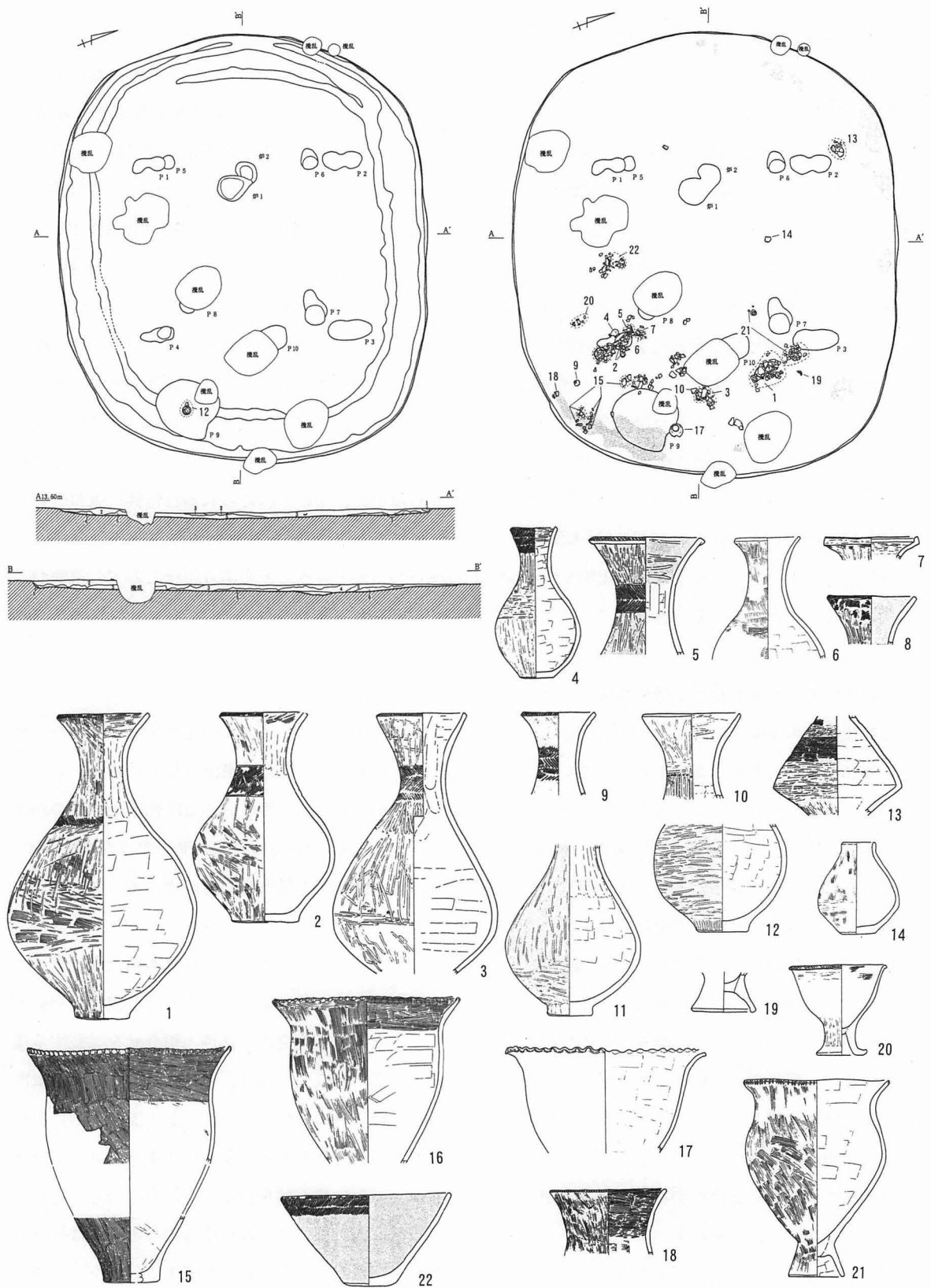
本住居址出土遺物は、確認面から床面までの深さが12cmとわずかということもあり、ほとんどの遺物がこの住居に伴うものである蓋然性が高く、この一括性は高く保証されよう。(伊丹 徹)

⑤赤坂遺跡第8次調査地点7号住居址 (第5・6図 中村・諸橋2001)

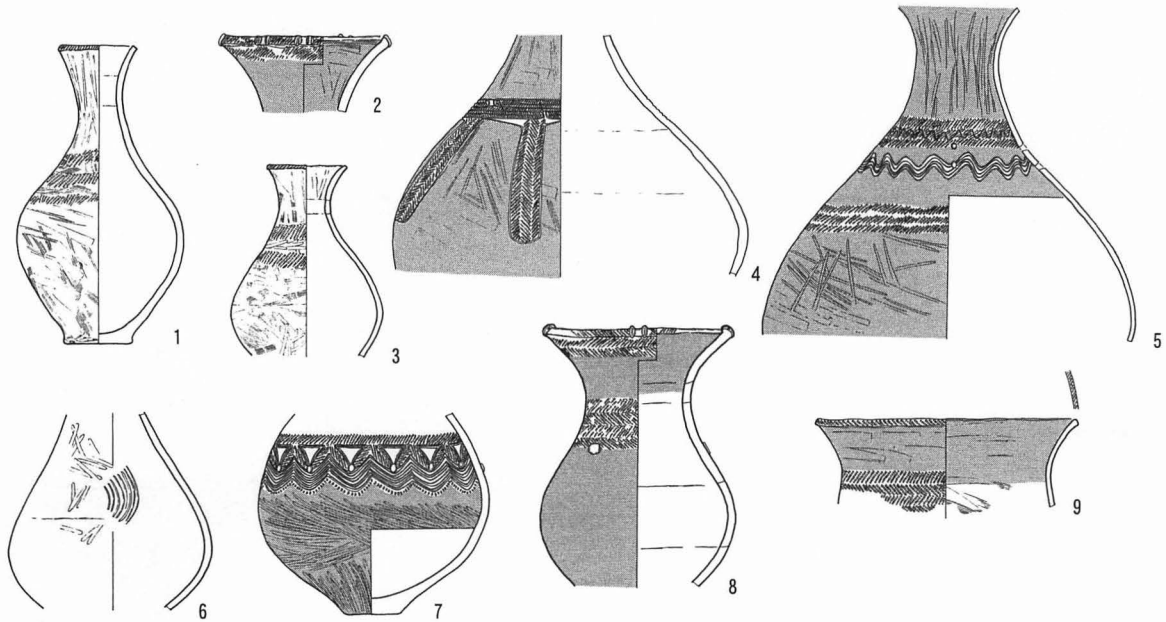
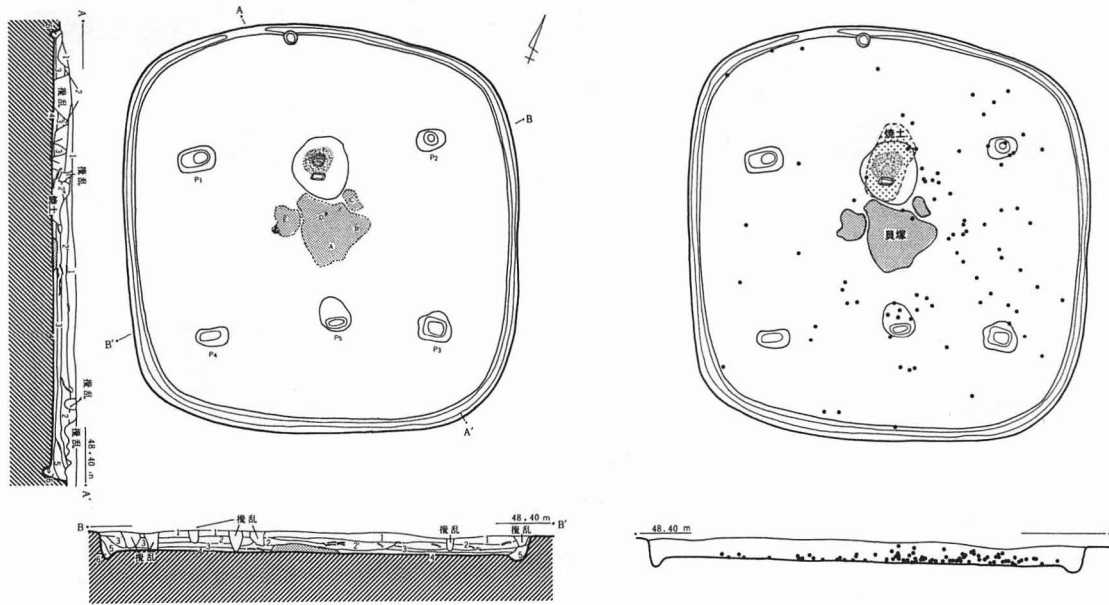
この住居址の規模はさほど大きなわけではなく、赤坂遺跡でも中形の6.52×6.34mのものである。また、覆土の堆積も最厚で40cmと深いわけでもないが、テンバコにして100箱分もの土器が出土したという。そして炉から住居址中央部にかけて魚骨・獣骨を多量に含む貝層も検出された。土器の分布は床面直上のものが多く、住居の東側にやや偏るようである。器種は壺(1~9)、甕(10~24)、鉢(25~30)のほか高坏(31)も認められる。甕が異様に多く、大形品も少なくない。特に10は県内でも最大級のものである。また壺にも大形のものが認められるが完形品には恵まれない。

テンバコ100箱分の土器が全て復元されたことを想像するまでもなく、これらの土器が本来の機能をこの住居址内で果たしていたとは到底考えることができない。報告者も述べているようにこれらの遺物は祭祀という行為での一括性、つまり廃棄の一括性の担保とはなりえるものの、使用の一括性・組合せを保証する限りではない。報告者は4細分した土層への帰属をできるだけ詳細に記載しており、今回提示した資料で床面直上出土のものは1・4・6・10~12・15・22・27・29~31、最下層の4層出土は21・25・26である。主体を占める甕のバリエーションは豊かで、口縁部の作りや胴部の調整、器形も様々なものがある。破片では櫛目鎖状文やヘラによる横走羽状文も微量ながら認められるが、脚台は全く見られない。無文の壺も一定量あるが、懸垂文(4)や結紐文(7)をモチーフとしたものや無区画の縄文帯を重ねるものなど意匠は様々である。ある程度の時間幅を考えたほうがよいであろう。脚部の裾に透かしを入れ、肥厚する口縁をもつ深い坏部の特異な高坏(31)は、壺底部に同様の細工を加えるものを含めても類例は少ない。近畿地方ではⅣ様

式の高坏や台付鉢などの脚台部に意匠を加えることがよくみられるがその影響だろうか。また、南関東では宮ノ台式に顕著な記号文をもつ壺（6）もみられる。



第4図 下寺尾西方A遺跡Y12号竪穴住居〔遺構S：1/120 遺物S：1/8〕

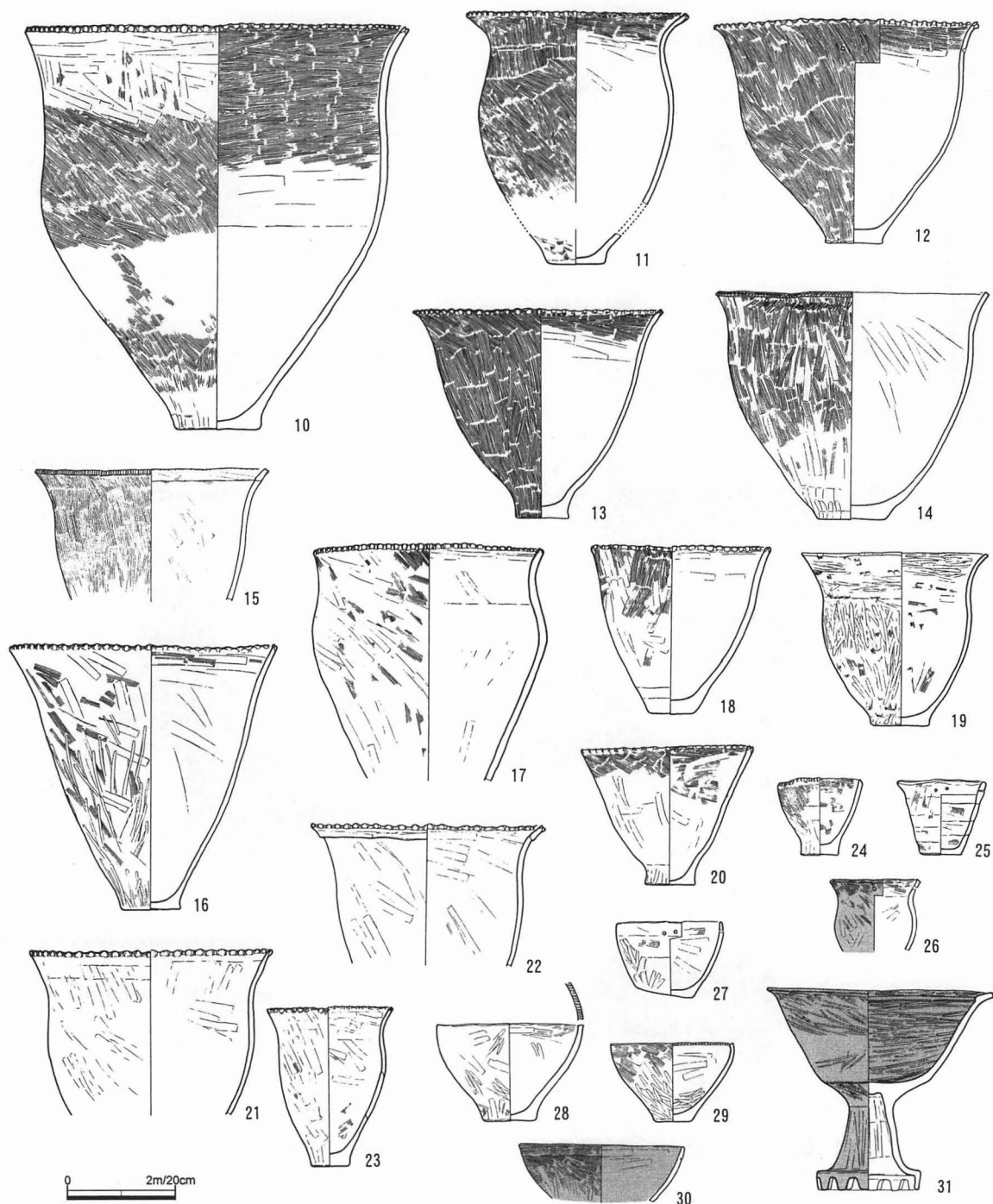


第5図 赤坂遺跡第8次調査地点7号住居址 (1) [遺構S : 1/120 遺物S : 1/8]

貝層における鹿角製筭およびベンケイガイ製貝輪といった非日常性を示す遺物の存在は、いっそう祭祀による一括性の可能性を高めるものではなかろうか。(伊丹)

⑥大塚遺跡Y51号住居址 (第7図 伊藤ほか1991・小宮ほか1994)

本住居址は、楕円形を呈し、4本の主柱穴と梯子穴、それに主軸上の奥寄りに地床炉、入口付近に貯蔵穴を一つ掘り込むという、ごく一般的な形態をとる住居址である。7.43×6.50mを測り、規模の点からも本遺跡の中でごく平均的といえる。主柱穴や周溝が重複して掘られていることから少なくとも2回の建て替えが想定される。本住居址は焼失住居と考えられ、床面上に炭化材などとともに遺物も多く残った状態で検出された。



第6図 赤坂遺跡第8次調査地点7号住居址(2) [遺物S:1/8]

器種としては、壺(1~4)、甕(5~8)が中心となる。壺は単純に外反する口縁部をもつ。頸部から胴部にかけては、斜縄文や舌状文を施す例と無文の例とがある。甕は口縁部にキザミをもつものと指頭押捺をもつものがある。9は、本来は台付甕であり、胴部が欠損した後に割れ口を磨いて台付鉢として再利用したものと考えられる。10は器形的には甕であるが、外面はハケの後磨かれている。また、LRの縄文帯の上に波状文を施文している。口縁内面にも縄文帯と波状文を施し、内外面ともに赤彩されており、鉢などと捉えた方が良いかもしれない。土器は全面に広がりを見せるが、なかでも炉址内と南西コーナー付近に遺物の集中が認められる。炉からは2・8・10が出土している。南西コーナー付近の遺物の集中部分で検出され



第7図 大塚遺跡 Y51号住居址〔遺構 S : 1/120 遺物 S : 1/8〕

たものは、3・7の他に小形の甕（口縁部にキザミをもつ外面ハケ調整のもの）がある。いずれもその場で潰れたかのような様相を示すものが多く、離れての接合は認められない。

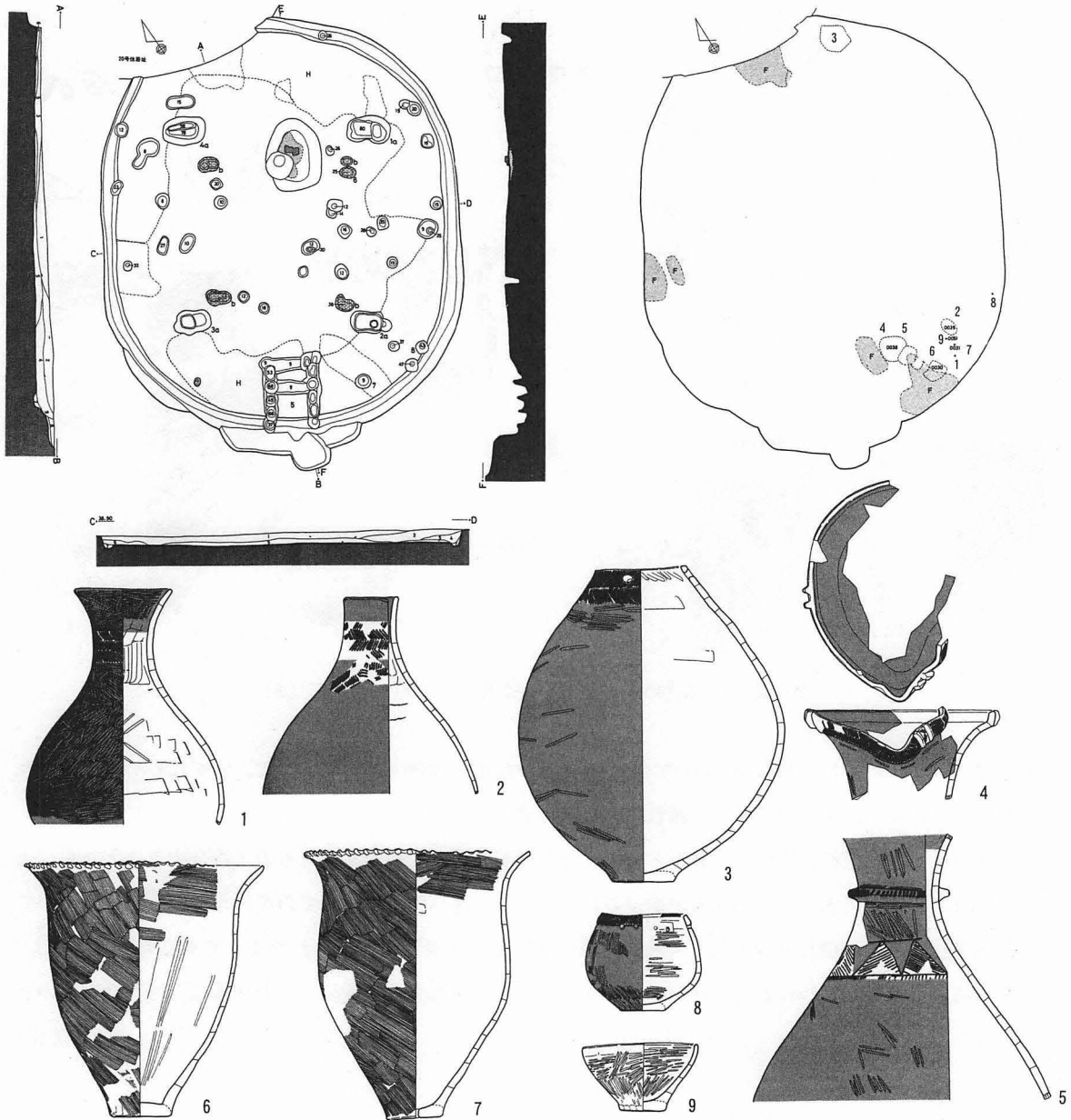
本住居址は、埋没過程に堆積した層から出土した土器が床面上で検出されたものと接合することから、火災後に人為的に埋め戻すといった行為が推定されるという。従って、短期間での埋没が考えられる。なかでも、炉内で検出された個体と床面直上で検出された個体は、火災時に放置されたままである可能性が高く、この住居に伴うものと思われる。これらのことから、炉内と床面直上で検出された個体は、一括性が高いと考えられる。

（飯塚美保）

⑦観福寺北遺跡21号住居址（第8図 平子・鹿島1989）

本住居址は、楕円形を呈し、4本の主柱穴と梯子穴、それに主軸上の奥寄りに地床炉を掘り込むという一般的な形態をとる。特徴的なこととしては、ピットが列なった形の出入り口施設をもつことがあげられる。10.68×8.43mを測り、本遺跡のなかでは比較的規模が大きい住居である。主柱穴の内側に、上面に貼り床がされたピットが存在することから、少なくとも2回以上の柱の移動を伴う建て替えがあったことが推測される。また、覆土中には、壁際を中心として焼土が厚く堆積していることから、本住居址は焼失住居である可能性が高いと考えられる。

掲載した土器は、いずれも床面上より出土したものである。器種としては壺（1～5）、甕（6・7）が中心であり、無頸壺とされた8や、碗とされた9などのようなものも出土している。壺は、頸部から胴部にかけては、羽状縄文を施文した個体、羽状縄文と沈線区画の鋸歯文を施文した個体などがある。3は口縁部から頸部が欠損した後、欠損部を擦って再利用したものである。掲載した壺はいずれも赤彩が施されていた。甕は6・7ともに口縁部は指頭押捺、外面はハケ調整されている。内面はハケもしくはヘラナデであるが、一



第8図 観福寺北遺跡21号住居址 [遺構S：1/120 遺物S：1/8]

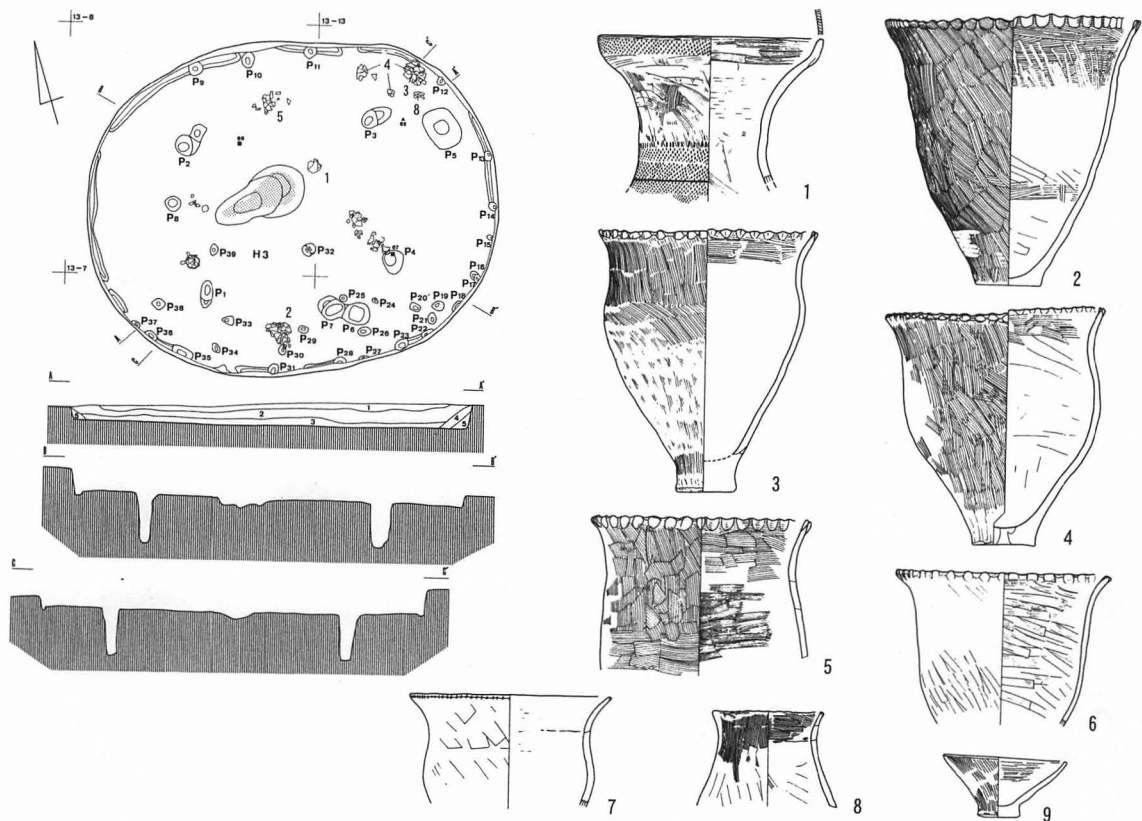
部ミガキがなされる個体もある。報告書に掲載された本住居址出土の甕は、いずれも指頭による押捺であり、キザミは認められなかった。これらの床面直上より検出した土器は、住居址の南東コーナー付近と炉の北側に集中する傾向が認められる。3は炉の北側から出土し、それ以外は南東コーナー付近からの出土である。

焼土や遺物の出土状態から、床面上から出土した土器はこの住居に伴うものと思われ、一括性が高いと考えられる。

(飯塚)

⑧折本西原-I 遺跡 3号住居址 (第9図 岡田・水澤編1988)

本住居址は他遺構との重複はなく、6.7×5.2mの小判形を呈する。炉は新旧の2基確認されている。壺(1)、甕(2～8)、鉢(9)があり、甕が多い。土器以外には床面から出土した土製円盤が2点、扁平な礫を利用した扁平片刃石斧1点などがある。覆土は最厚で37cm程度であり、自然堆積と判断される。遺物は覆土か



第9図 折本西原-I遺跡3号住居址 [遺構S:1/120 遺物S:1/8]

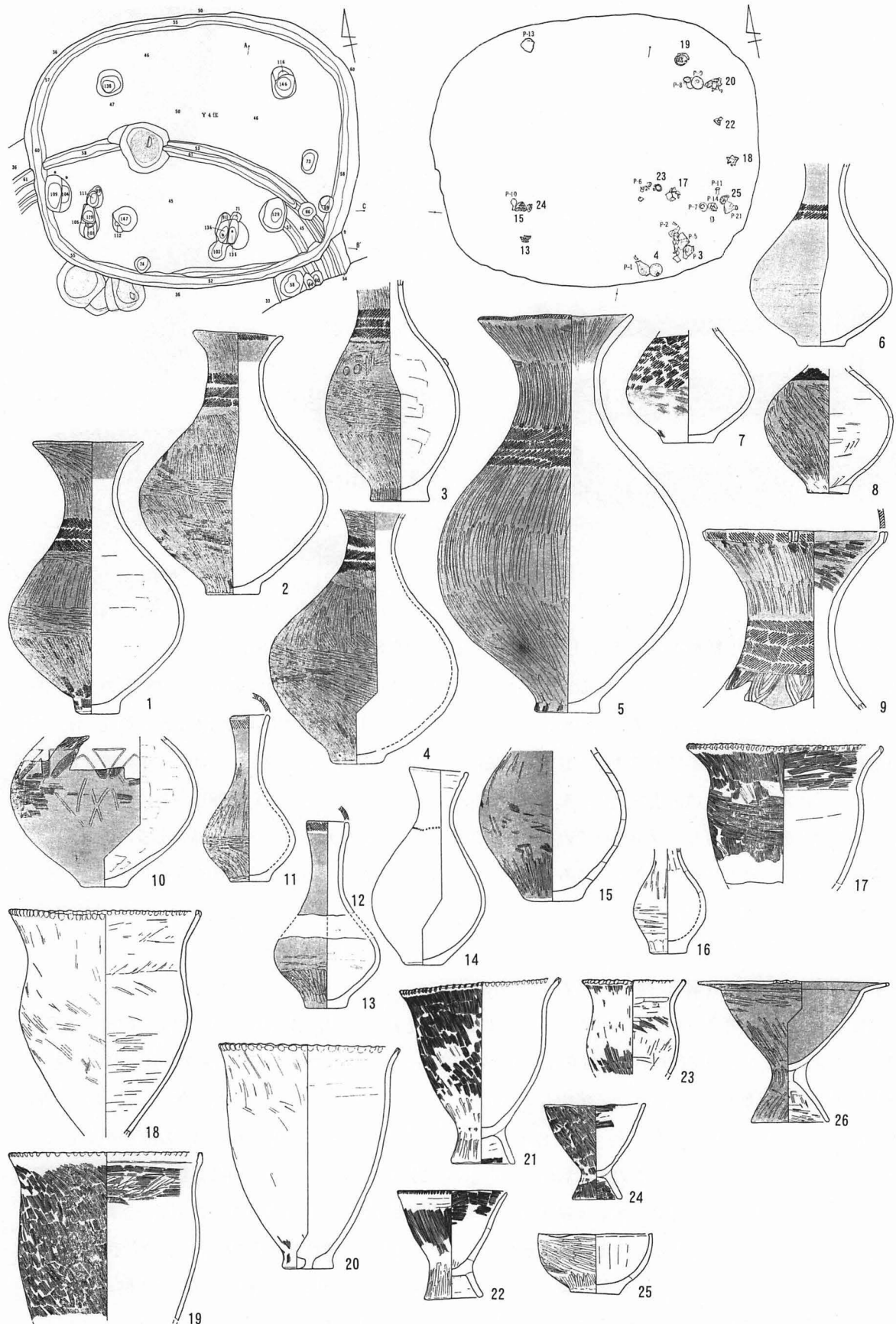
ら床面にかけ多量に出土している。床面出土とされたものを図示したが、これらのうちほぼ完形の2は南壁際、3は北東角際からその場で潰れた状況を呈しているものの、4は3のすぐ西側に1m程の範囲で散っている。また、5は胴部上半以上の残存、6～8は破片からの復元実測であり、1・6は覆土中の破片と接合するものである。報告書の出土状況写真を見ると、3・4・8が出土した住居北東側を中心に覆土中から床面まで遺物が分布しており、埋没過程での投棄行為が見て取れることから、2・3以外の土器については住居廃絶後の投棄遺物と理解すべきものだろう。従って、ほぼ完形に復元された2・3も含め、一括性・同時性を保証できるものではない。

(新開基史)

⑨折本西原遺跡Y4号住居址(第10図 石井ほか1980)

報告されている土器のうち、床面から出土した26個体を提示した。住居址は6.70×5.55mの隅丸長方形を呈し、遺構確認面からの深度は最も残存のよいところで30cmを測る。北西隅は床面に達する程の攪乱を受け、遺物は東寄りから東南側のコーナーに集中して出土した。壺(1～16)、甕(17～24)、鉢(25)、高坏(26)がみられ、石器は「小形ノミ形石斧」(扁平片刃石斧か)、打製石斧や磨石・敲石類、砥石などが出土している。炉の南側には13・15・24などの比較的法量が小さい土器がみられる。この内13の壺胴下半部は、東壁際から出土した口頸部と同一個体であると目されており、そうであれば一個体の破片が約4mの距離を隔てて床面上に遺存していたことになる。土器はほとんどの場合床面上から潰れた状態で出土し、その1/3程度が口縁から底部まで残存している。その他の場合でも、壺は口縁または口頸部を、甕は底部を欠く例が多い。このうち4はほぼ正位の状態でも南側壁面近くから出土した。こうした状況から鑑みて、これらの土器は本址の廃絶前後に床面上に遺棄されたのち、埋没したものと考えられる。

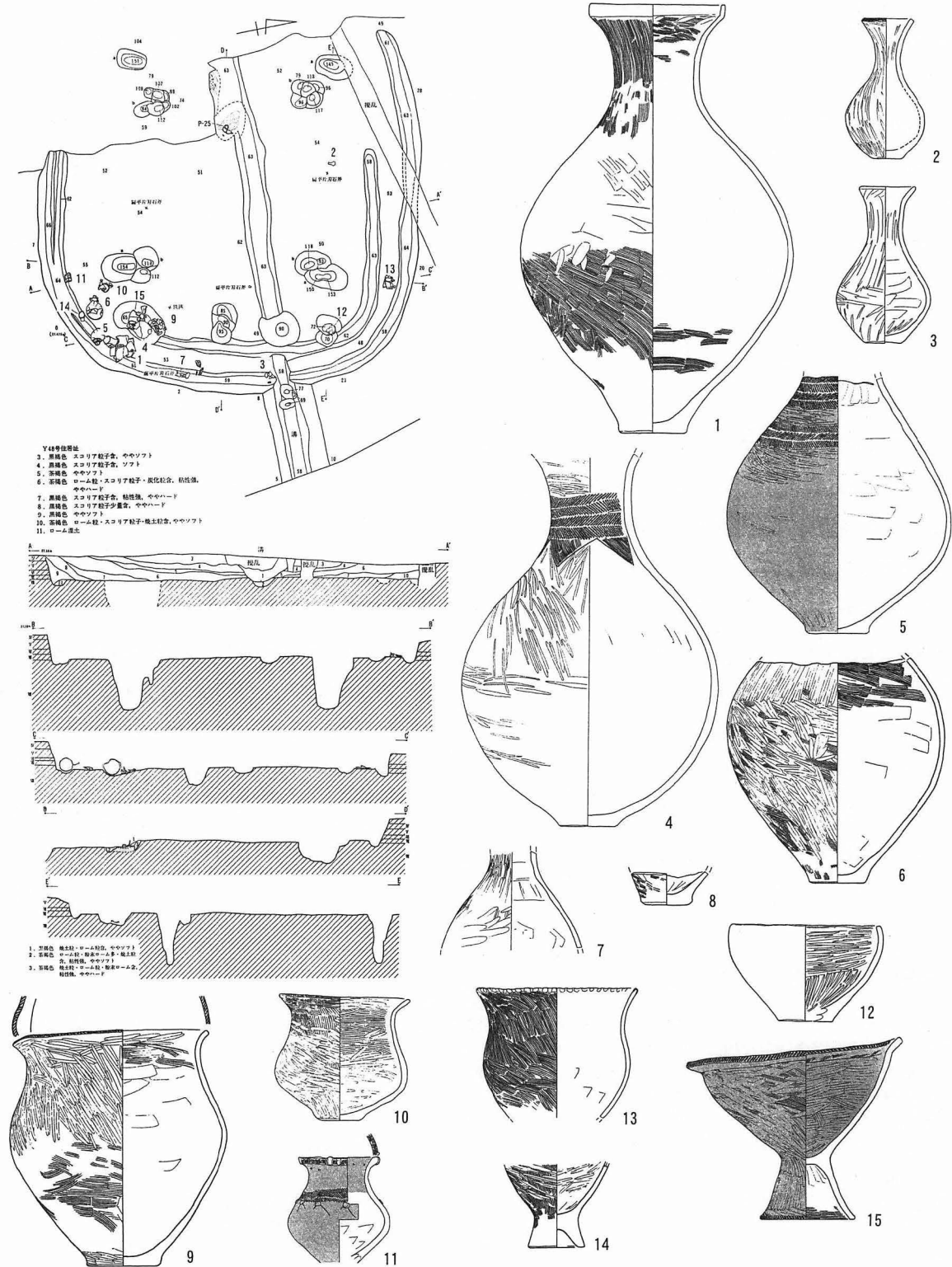
(渡辺)



第10図 折本西原遺跡 Y 4 号住居址 [遺構 S : 1/120 遺物 S : 1/8]

⑩折本西原遺跡 Y48号住居址 (第11図 石井ほか1980)

本住居址の西側は約1/4を削平されており、残存する南西側の柱穴位置を勘案すれば本来の規模は8.5×7.4 m程と推測される。三重に掘削されている周溝と最低3回以上掘り直された柱穴から、3回以上の拡張なし建て直しが行われている。



第11図 折本西原遺跡 Y48号住居址 [遺構 S : 1/120 遺物 S : 1/8]

壺（1～7）、甕（13）、広口壺（9～11）のほか鉢（12）、台付鉢（14）、高坏（15）があり、壺類の数が圧倒的に多い。完形品が多く、肩部以上を欠失した壺6も欠損部を平坦にしており、継続して使用されたことが想定される。土器以外には鉄鏃1点、扁平片刃石斧4点が出土している。覆土は30～50cm程度残存しており、いわゆる壁際三角堆積も認められ、概ねレンズ状の堆積を示すことから自然堆積と認め得よう。壁際から少量の弱い焼土と炭化材が検出されているが、床面の被熱痕跡は全く認められず、焼失住居ではない。遺物は覆土中からの出土が少なく、床面からの出土が大半である。炉において台ないし支脚として二次利用されたと見られる底部8を除けば、ほとんどの完形・半完形土器は横倒しなないしその場で潰れた状態で床面の東側、特に南東角付近から集中して出土している。これらは出土位置・状態と覆土中遺物が僅少であることを勘案すれば、廃絶後初期の段階までに一括して埋没している可能性が高く、それが居住時の配置を示さないとしても、一括性は高いと判断される。これらの内、4・9・15は床面より10cm程度掘り下げられた土坑状の部分から出土しており、報告者は本址より新しい土坑に伴う遺物の可能性も示している。しかし、覆土に特に差異は認められなかったという報告者の所見もあり、特に本址に伴うことを否定するものではない。（新開）

3. まとめ

出土土器の器種・数量の豊富な5遺跡10遺構を対象に一括資料としての検討を行った。検討資料は宮ノ台式の中段階以降に偏っているが、壺、甕および鉢や高坏の共伴状況を確認し提示した。今回の資料では、器形や文様の変遷、対応関係に従来の編年観と特に齟齬はないことが明らかであるが、資料としての充実はさらに蓄積すべきであろう。

竪穴住居址における土器の出土状況については、床面上で土器がまとまって出土する場所は炉付近や貯蔵穴周辺の住居址壁際に多いという傾向は、今回の検討対象とした資料でも認められた。しかしまた、住居址の床面上から出土した土器であっても、その場所で潰れたような出土状態の土器と完形に近い土器でありながら離れた位置に分散して出土する土器とがあることも事実である。それぞれそこに遺存することになった経緯が異なっていることが考えられるのであるが、一方住居廃絶後の埋没過程における比較的短い時間幅の中に両者を位置付けることも可能であろう。使用時の一括性を判断できる状況に無くとも、廃棄時の一括性もしくは住居廃絶時の同時性を保証できる資料として提示できれば、編年基準資料や交差年代基準資料として不足ないものと考えられる。（池田）

引用遺跡に関する文献

- 井澤 純ほか 2003 『下寺尾西方A遺跡』かながわ考古学財団調査報告157
 石井 寛ほか 1980 『折本西原遺跡』横浜市埋蔵文化財調査委員会
 伊藤 郭・武井則道ほか 1991 『大塚遺跡』港北ニュータウン内埋蔵文化財調査報告XⅡ
 岡田威夫・水澤裕子編 1988 『折本西原遺跡-I』折本西原遺跡調査団
 小宮恒雄・武井則道ほか 1994 『大塚遺跡』港北ニュータウン内埋蔵文化財調査報告XⅤ
 中村 勉・諸橋千鶴子 2001 『赤坂遺跡』三浦市埋蔵文化財調査報告書5
 平子順一・鹿島保宏 1989 『観福寺北遺跡・新羽貝塚発掘調査報告書』横浜市埋蔵文化財調査委員会

参考文献

- 安藤広道 1990 「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分」上・下 『古代文化』42-6・7
 安藤広道 1991 「相模湾沿岸地域における宮ノ台式土器の細分」『唐古』田原本唐古整理室OB会
 梅崎恵司 1994 「弥生時代西日本の高坏脚部の透孔」『古文化談叢』33
 永井宏幸・村木 誠 2002 「尾張地域」『弥生土器の様式と編年 東海編』木耳社
 弥生時代研究プロジェクトチーム 2001～04 「宮ノ台式土器の研究」1～4『かながわの考古学 研究紀要』6～9
 かながわ考古学財団